

陽気ぐらしの歩みを進めよう



少年会総会でおつとめを勤める少年会員。10年後には立派なようばくに (3月30日)



発行所
 天理教 芦津大教会
 〒546-0003
 大阪市東住吉区
 今川8丁目6番32号
 電話 06 (6702) 1980
 FAX 06 (6700) 1854
 Eメール shinmei@ashitsu.or.jp
 印刷所 天理時報社

たすけの道にいそしむ日々は、晴れやかな喜びに包まれ、湧き上る楽しさに満たされる。それは、常に、温かい親神の懷に抱かれ、人をたすけて我が身たすかる安らぎの中に身を置くからである。
 『天理教教典』第十章「陽気ぐらし」

今年の「教会長年頭会議」で大教会長は、「10年後の教祖百五十年祭と翌年の立教二百年の節目の旬には、各々の教会が今よりも進展した姿を見せていただけるよう、成人の歩みを着実に進めたい」と仰せられ、そしてその歩みに、「おつとめ、おさづけ、理づくり」を芯に据えるよう示されました。

私たちようばくは、教祖がお教えくださったおつとめを勇んで勤め、教祖から戴いたおさづけの理をもつて人だすけに励ましていただく。そして常日頃から、いつ、どこで、何があってもおたすけができるよう、神様に働いていただくための理づくりを心掛ける。そんな中から、自分のささいな行動が人だすけに繋がったとき、私たちはかけがえない喜びを感じるのです。これこそが陽気ぐらしの生き方。おつとめ、おさづけ、理づくりを芯に「人にたすかっていたらいい」という心で行動することで、私たちは陽気ぐらしへの歩みを進めることができます。次の教祖百五十年祭への年祭活動は直前の3年間ですが、陽気ぐらしへ向けての成人の歩みは、いつでも始められるのです。

正面四方

教祖は72歳の明治2年正月から13年にわたり筆を取り、1千711首のおふでさきをお記しくださった。

78歳の高齢から18回におよぶ留置、投獄迫害に遭われ、特に89歳のとき、おつとめをしたことを理由に投獄された。しかし教祖はいささかも変わることなく、おつとめの大切さを教えてくださった。

先輩先生のお話に「教祖は、長生きの秘訣として、短気を出すのやない。いつも、いつも18の心で通るのやで。そうして『もう』という言葉を使うのやないで。もうと言えは先が短い。まだまだと言わねばならん」とお諭しになった」と聞かせていただく。

年老いても「私はもう年や、何も役にたたない」とぼやかず、元気を出したい。教祖のひながたこそ、私たちの長生きの道である。

《3月月次祭 挨拶》

教祖年祭の元一日に立ち返って 次への歩みを進めよう

大教会長 井筒梅夫

皆様方には、たすけ一条の道にご丹精くださいまして、誠にありがとうございます。只今は、3月の月次祭を共に勇んで勤めさせていただきましたことは、大変ありがたい次第です。月次祭に当たって、思い当たるところをお話しして、ご挨拶と致します。

さて、『徒然草』という随筆集をご存じだと思います。鎌倉時代に吉田兼好が、自身の経験から得た考えや逸話を24話にまとめた書物です。私は国文学に決して明るいほうではありませんが、聞いた話として、この中にある「木登り名人の逸話」は示唆に富んでいますから、その話をしたいと思います。

ある日、木登り名人が弟子に高い木の枝を切らせていたので、一番高い所の、大変危険そうな作業中は注意のひとつもしない。枝を切り終えて降りるとき、ちょうど軒先あたりの高さの所で「怪我をしないように気をつけて降りなさい」と言葉を掛けたのです。その弟子は、「これくらいの高さなら、飛び降りることもできますよ」と言ったところ、その木登り名人は、「目が回るような危ない所では、用心するからあえて注意はしない。けれど、なんでもないところで安心してしまつて怪我をするのだ」と答えたのです。これは危険な状況においては、それを回避するために必

死になるけれど、「これで安心」と気を緩めれば、かえって危険な目に遭うという教訓です。

お道の信仰者であるお互いは、その多くが代を重ねていると思います。元を尋ねれば、入信の動機は、身上や事情をおたすけにいただいたことが大半を占めているでしょう。つまり、難しい身上や事情という、一番危険なところを通られたのが、それぞれの信仰初代です。

身上や事情という危険な状況から、何とか御守護いただきたいと、親神様にしがみついて必死になつて一生懸命に勤めてくださったはずです。そこから信仰の代を重ねた私たちは、今、安心できるところにいると言えるのではないのでしょうか。しかし、安心して切つて気が緩んでしまい、大変な節を見せていただくことが往々にしてあるように思います。

やはり、代を重ねた信仰者として大切なことは、元一日に思いを馳せて、信仰の元一日を忘れないことだと思います。初代はどんな思いでこの道を通つてくれたのか。ここに思いを致して、その信仰を今の私にどのように繋いでいけばよいのかをよく思案して、これを今の信仰に生かしていくことを忘れてはならないと思います。時々折々には、信仰の元一日をしっかりと思案していただきたいのです。

教祖がお姿を隠された直後の、飯降伊蔵先生を通してのおさしづで、

神が扉開いて出たから、子供可愛い故、をやの命を二十五年先の命を縮めて、今からたすけするのやで。しっかりと見て居よ。今までとこれから先としっかり見て居よ。 明治20年2月18日

と、親神様の御心の内をお示しくございました。教祖年祭の元一日は、親神様が扉を開いて、教祖御存命の理をもって世界たすけに踏み出された元一日です。

では、私たちようぼくは、いかにして世界たすけに勤めればよいのか。教祖は、ようぼくが世界たすけの道を通る手立てとして、つとめを教え、さづけを渡されて、たすけ一条の道をおつけくださった。そして今日までも、またこれから先も、御存命の教祖が世界たすけの先頭にお立ちくださって、私たちを導いてくださるのです。この教祖年祭の元一日に立ち返って、次への歩みを進めさせていたいただきたいのです。

私たち一人ひとり、真柱様を通して、教祖からおさづけの理を頂戴しているようぼくです。お互いによくとしての自覚と喜びを胸に湛え、たすけ一条の道の根本であるおつとめとおさづけ、これを芯に据えたおたすけに勇んで働いて、ようぼくとしての

の務めを果たしていきたいと思えます。次に向けての一手一つの勇んだ歩みをお願い申し上げる次第です。

それでは、今月もこの参拜場でお互いのおさづけの取り次ぎをさせていただきますと思います。つとめとさづけでたすけていただく道です。どうか心を込めてお取り次ぎをさせていただきますましよう。

(要約)

立教百八十九年 三月月次祭祭文

この神床にお鎮まり下さいます親神天理王命の御前に、天理教芦津大教
会長井筒梅夫、慎んで申し上げます。

親神様には、月日にハセカイちう、ハみなわが子 たすけたいとの心ばかりで、と、限りなく深いお慈しみのまに、お育て下され、大難を小難、小難を無難へとお導き頂きまして、陽気ぐらしへとお連れ通り下さいます親心の程は、誠に有り難く勿体ない極みでございます。私共は親神様の御恩を心に刻んで、たすけ一条の道の進展の上に、届かぬながらも努め励まして頂いておりますが、その中にも今日の吉日は、当教会にお許しを頂きました尊き日柄でございますので、只今から役目にあずかる者一同、心を一つに揃え、座りづとめ、陽気てをどりを勇んで勤めて、三月の月次祭を執り行わせて頂きます。御前には、今日を大切な一日と参き集いました芦津の道の子達が、相共におうたを唱和して、おたすけの御守護と世の治まりを請い願う誠の心をお受け取り下さり、親神様にもお勇み下さいまして、遍く世界に御恵みをお垂れ下さいますようお願い申し上げます。

私共をはじめ、芦津の理に繋がる教会長、ようぼくは、銘々が道の上になくてはならない人材に成人させて頂けるよう、ようぼくの自覚と喜びを胸に湛え、たすけ一条に勇んで立ち働かせて頂いて、教祖百五十年祭への門出に相応しい道の歩みを進めさせて頂く決心でございます。

何卒、一同の道の為に尽くす真実の心をお受け取り下さいまして、温かき親心のまに、次の成人の塚への始動の句をお連れ通り下さいますと共に、身上に苦しみ事情に悩む人々の上には尊き御守護の理を賜りまして、世界一れつの心が澄み渡り、互いにたすけ合い睦み合う陽気ぐらしの世界に一日も早く建て替わりますようお導きの程を、一同と共に慎んでお願い申し上げます。

《3月月次祭 神殿講話》

新しい人を信仰に導く

積極的なをいがけ・おたすけを

役員 奥田眞治

教祖百四十年祭活動も一区切り

を迎え、それと同時に、教祖百五十年祭、立教二百年という大きな旬に向けて、次へのスタートを切ったばかりです。

この門出にあたりお互いは、つとめとさづけを心に据えたすけ一条の実践に取り組むことを申し合わせ、そして大教会長様より、「これから先、10年掛けて私たちが心掛けて取り組んでいかなければならないことは、一つは新しい人を信仰に導くこと。もう一つは次の世代に信仰を伝えていくこと。この二つだと考えます」とお聞かせいただいたいております。

そこで今日は、外へ向けての積極的な働きかけである布教について、私の体験談から話を進めたい

と思います。

後継者として布教の家に

私は天理教校附属高校、第二専修科を卒業して、すぐに海外伝道部派遣のブラジル伝道序の青年勤めに1年間、ブラジルへ渡りました。その後、お礼勤めを38母屋で務め、大教会長様の御命で台湾に渡り、日本語学校の教師を兼ねて住み込み青年を2年間勤めました。

この間に自教会の後継者となり、当時、教会長である父から手紙が届いたのです。「これからは教会の後継者として勤めてもらいたいのだが、その場合は将来のことを考えて、1年間ご本部の布教の家に行くという条件で勤めるように」と、したためてありました。

この手紙が「布教の家 愛知寮」に入寮するきっかけとなりました。

愛知寮へ出発する前、三代真柱様より神殿で直々に、「これから1年間、没頭して布教に明け暮れてもらうことになりましたが、大切なことは教祖の御伴をして歩かせてもらうということ。そして、これから向かう布教地はそれぞれ違うけれども、生涯の布教地として務めることを心を定めてもらいたい。布教の勉強や、仮の布教地ではない」とお聞かせいただいたのです。当時の寮生(第41期生)は15名で、甘田耕一先生を寮長として、特別派遣委員に筒井敬一先生をいただき、1年間の修業に臨みました。

にをいがけは、やはり戸別訪問です。インターホン越しに、反応があれば「ごめんください。天理教の者です」少しお時間を頂いて神様のお話を……このあたりで「結構です」「忙しいので」と、お決まりの文句で断られます。

これを大体1日に20軒ほどこなしたら1日は終わりです。このよ

うに断られると分かっていてもひたすら回り続ける訳で、どれだけそれを持續できるか、これが大変なのです。

おさづけの取り次ぎ

そうしてつとめていた教祖誕生祭の4月18日。その日は回り始めて20軒も回っていなかったと思います。庭先に出ておられた織田さんという奥さんとお話ができました。天理教の布教師と名乗っても警戒する様子もなく、病たすけのおさづけの話をひとしきり話しておりましたら、ご主人がタクシーで病院から帰ってこられました。おそらくもうすぐ帰ってくるだろうご主人の帰りを、外に出て待つておられたのでしょう。奥さんは話を遮ってご主人のもとへ駆け寄ります。私はとっさにご主人の空いているほうの腕を持って寄り添い、一緒に歩き出しました。断りもなく、自然な形で居間に一緒に入り、ご主人が席に着かれましたので、奥さんに向かって、「今、説明していたおさづけ、させていた



「いただきますね」と言って、ご主人にも同意を得て、取り次がせていただきました。病名はパーキンソン病でした。布教に出て初めておさづけを取り次がせていただきました。

にをいがけは、正にタイミングだなと思いました。偶然その場に出会わせていただけるかどうかは、教祖の導きにあると思いました。それから3日間通い、3日、3日と続けました。そのときの心定めは3日間の断食と十二下りのをどりでした。難病ですから直ぐにはよくはならないのです。

れしておちばへ帰るのに、「奥田さん、にをいが掛かったと言っていた方、おちば帰りはどうですか？」と誘ってくれました。

織田さんに早速声を掛け、おちば帰りを誘ってみますと、奥さんは「何か行事はあるのですか？」と聞かれましたので、「お話を聞く行事があります」とお答えしました。別席のことです。「それなら行ってもいいですよ」ということになり、教務支庁の車を借りて、初めてのおちば帰りが叶いました。ご主人はご身上ですので、奥さんが付き添うという形で初席者2名の御守護を頂いたのです。

それから3席目までは運ばせていただきましたが、その後は病状が進んでしまい、入院を余儀なくされまして、再びおちばへ帰っていただくことはできませんでした。私の真実が足りなかったと、とても反省をいたしました。

のです。少なからずこれまでの下積みがあつてのことと思案をさせていただくのです。

にをいがけを積み重ねる

学生の頃に戻りまして、第二専修科で最も厳しかったのは、3年生のときの布教実習です。当時は京都と奈良に実習所があり、筋肉隆々の若者たちが、半年後にはげっそりと痩せた姿で戻ってくるのですから、飢えとの戦いのようなものです。

はじめはひのきしんの日ばかりが続く、「誰もにをいがけに行かせてください」という者がいない」という声を聞いて、ここぞとばかりに2人一組でにをいがけに回りだしました。事務所に挨拶に行きますと、「心定めはどうする？」と言われます。「おさづけを取り次ぎます」と答えると、「できなかつたらどうする？」と言われます。「夕食をお供えます」。1日2食しかないので、食べられなかつたら大変だということで、必死で回りまわして、その日は足を骨折した人に

出迎え、無事に取り次ぐことができました。その気になったら、できるものだと思います。

また、おちばで雪が舞う頃になると、野宿布教に出るようになる、両手は凍傷で腫れ上がり、いくらダンボール紙で寝床を拵えても、寒さで一睡もできなかつた経験をしました。

おさしづに、
だん／＼始め掛けは一日々々、
重々の理が積む／＼。積んだ後
というは、今までの道を通した
も同じ事、身の内という理がある
で。これ一つ聞き分けたら、
何にも案じる事は要らん。

明治25年5月28日

とあります。非常にありがたいおさしづです。これは、こうした布教の経験はその時だけのものではなく、一連の流れとして親神様、教祖は受け取ってくださいているのだとお聞かせいただけます。

しばらくにをいがけができていなくても、次に始めるときには、その続きから積み重ねていくこと

になり、「今までの道を通したのも同じこと」としてお働きくださる。大切なことは、どうやってにをいがけを積み重ねていくかです。

理づくりの大切さ

にをいがけを続けていきますと、何時かはにをいがけかかると思いますが。しかし、せつかくにをいがけかかっても、身上者が必ずたすかるとは限りません。やはり、「たすける理無くばならん」と仰せられますように、理づくりが大切です。先生の先生方ほどのように通られたのでしょいか。

愛町分教会初代会長・関根豊松先生の初めての布教の話を紹介致します。

「私は21歳のとき、丁稚奉公を辞めて初めて布教に出ました。麹町の老会長様（久保治三郎・三代会長）と東京のある長屋を借りて足固めを始めたものです。

明治37年秋ごろのこと、東京近郊の羽田村（現・東京都大田区）の家の62歳になることさんに、にをいがけが掛かりました。肺を患って

5年も病床にあえいでいたのです。糞谷は、日蓮宗の盛んな村でした。私は3日3夜のお願いをかけました。私としては死にものぐるいです。私が神様を信じたと同じく、村の人たちに神様を信じさせねば道の名に傷がつくというので一生懸命です。

2日、3日、病勢は依然として悪いのです。3日目の晩、私は刃物を研ぎました。『こんな信じてきっている神様に裏切られるなら、もうやけくそだ。その場で腹を切つて死んでしまおう』という、実際にどうも若気の至りと申しながら、無鉄砲なことを考えたものです。

しかし、そこまで信じきり、やりきつたら神様も『仕様のない子供だ』と思われるのか、4日目の朝、刃物を懐中にしてその家を訪ねると病床に病人はおらず、年寄りのおばあさんが台所でお茶を沸かしています。おやつと思つてみると、そのおばあさんが飛んで出て、『先生……』と抱きつきます。

よく見ると昨晩までふうふう言つていた病人です。そして、『先生

がお見えになると思つて、今朝からこれで3度もお茶を沸かしていますよ』と言いました。そのときのうれしさは、たすけた人でなければ分かりません。

これもしかし、後で考えてみますと、私が子供であったために、死のうとまで思つた私にそのお働きを見せてくださったものであります。』

【みちのとも 昭和21年3月号参照】これは正に命がけのおたすけです。おさしづに、

我が身捨て、も構わん。身を捨て、もという精神持つて働くなら、神が働く、という理を、精神一つの理に授けよう。

明治32年11月3日とあり、ようぼくの誠真実の心一つで、どのようになでも親神様はお働きくださいます。

また、にをいがけという。古き論にある。一人の精神の事情あれば、一国とも言う。

明治25年5月28日とあります。にをいがけというも

のは、古い論しにあるように、一人の人が真実の精神を定めるなら、一国にもにをいを掛けることができると、お聞かせいただきます。

お互いに、にをいがけに出させていただくときには、成つても成らなくても、どうでもの精神を定めて掛からせていただくことが大切です。

次への一步を

10年先を見据えて「新しい人を信仰に導く外へ向けての積極的な働きかけ、にをいがけ・おたすけ」を共に務めさせていただきたいと思ふ上からお話をしてまいりました。にをいがけは戸別訪問だけではありません。自分でできるにをいがけの方法は、いくらでもあります。

お互いに工夫をしながらコツコツと心勇んで理を積み重ねていくように、そして親神様、教祖を信じ切り凭れ切つて通らせていただき、次への一步を歩ませていただきましょう。

教祖百四十年祭

学生おぢばがえり大会

3月28日、本部中庭で「教祖百四十年祭 学生おぢばがえり大会」が開催され、全国各地からお道に繋がる高校生、大学生、専門学校生ら約3千800人が親里に帰り集った。

芦津学生会（毛利祐太委員長）は、27日から「直属隊」を編成。本部参拝、昼食の後、前夜祭で出店する模擬店準備として、看板とのぼりの色塗りを行った。夕づとめに参拝後、前夜祭に参加し、模擬店やステージを楽しんだ。

翌28日、午前10時から本部中庭での式典に参加。真柱様のメッセージを中田善亮表統領が代読され、学生たちは素直に親を信じることの大切さを学んだ。その後、参加者全員でおつとめを勤めた。

午後からは、各教区から帰参した学生たちも合流し、詰所で直属アワーを開催。はじめに大教会長がお話。教会に



直属アワー、大教会長を囲んで記念撮影

繋がる意味について、分かりやすく話された。

昼食は食堂で焼肉。その後のアトラクションでは、班対抗のクイズやゲームなどで盛り上がった。毛利委員長は、「今後も大勢の学生に参加してもらい、楽しく明るくお道の素晴らしさを学んでいきたい」と語った。

芦津からの参加者は、高校生（中学3年生を含む）31名、大学・専門学校生23名、計54名であった。

立教百八十九年 春季 霊祭祭文

これの祖霊殿にお鎮まり下さい、初代真柱中山眞之亮の霊様、二代真柱中山正善の霊様、初代真柱夫人中山たまへの霊様、本席飯降伊蔵の霊様、並びに芦津大教会初代会長井筒梅治郎の霊様をはじめ、歴代教会長の霊様、眞明芦津の道の上に尽くし伏せ込まれました役員、教会長、ようぼく、信者諸々の霊様、更にはこの度新たに霊代に書き記し併せて祀る大教会役員、芦東分教会二代会長、本津分教会六代会長吉田重男の霊様、吉野川部属上郡分教会三代会長夫人大西明代の霊様、併せて千五百三十柱の霊様の前に、天理教芦津大教会長井筒梅夫、慎んで申し上げます。

初代真柱様並びに三柱の霊様には、道の芯としてようぼくの先頭に立たれ、世界たすけにご丹精をお重ね下さいました。お陰を以てこれの御教えの道が伸び開けて、今日のたすけ一条の道がございます。又、初代梅治郎の霊様には、教祖より賜りました「大阪に大木の根を下ろして下されるのや」との尊きお言葉のまに、眞明芦津の親として、いかなる中も神一条に徹せられて、にをいがけ、おたすけに、修理丹精の上に誠を尽くされ、お屋敷に在っては、ぢば一条に眞実を尽くし運び、初代真柱様に真心厚くお任せ下されて、今日の大教会の礎をお築き下さいました。又、夫々の霊様には親神様の奇しきお手引きによって、眞明芦津の道の草分けの頃から今日に至るまで、代々ならん中をも神一条に眞実を伏せ込まれ、或は国々処々に在って、艱難苦勞の道すがら心倒さず眞心を尽くして、たすけ一条にお励み下さいました。

これの道が年と共に伸び栄え、幾重の事情も乗り越えて、今日御教え通りの道を歩ませて頂いておりますのも、親神様、教祖の厚き御守護と深き親心に導かれてのことではございますが、又一つには霊様が永の年限、代を重ねて伏せ込まれた眞実の賜と、朝夕御礼を申し上げて怠る時とてございません。その中にも今日のこの日は、今年の春の霊祭を執り行う定めの日柄でございますので、只今は一同陽気に十二下りのてをどりを勤めさせて頂き、御前に種々の心尽しの物を供えて、在籍者をはじめ、参き集う人々と共に、御遺徳を称え、御生前の御丹精を改めて厚く御礼申し上げたいと存じます。

私共をはじめ、教会長、ようぼく一同は、教祖百四十年を厳かに且つ賑やかに勤め終えて、次の成人の塚に向けて歩み出したこの旬に、ようぼくの自覚と喜びを胸に湛えて、一手一つにたすけ一条に勇み励ませて頂く決心でございます。

何卒、一同の道に尽くす眞心を御心安らかに受け取り下さいまして、成人の歩みを弛むことなく進めさせて頂けますようお見守りの程を、一同と共に慎んでお願い申し上げます。

わかぎの集い

3月29日から30日朝にかけて、中学生を対象に「わかぎの集い」を大教会で開催し、12名が参加した。

午前10時より、神殿で開講式が行われ、加世田洋・少年会芦津団団長の挨拶の後、おつとめ練習。

少年会総会で勤める座りづとめの役割に分かれて練習し、

参加者はそれぞれの担当の先生の話を真剣に聞き入り、最後に神殿で全体練習を行った。

昼食後は、陽気ホールで学生会スタッフと共にウォーミ



ングアップを行い、緊張感もほぐれ、参加者同士の距離が縮まった。次に「ペットボトルチャレンジ」を実施した後、

大教会館内を使ってクイズラリーを行った。大教会内を用意されたクイズを班で協力しながら楽しく解いてまわった。

その後、こともおちばがえりの新しいテーマソング「みちのこキラリ」のダンスの練習を行った。

夕づとめ後、会食。たこ焼きを食べながら、デザートをかけて、イントロクイズを行い、大いに盛り上がった。

30日は朝づとめ後、閉講式。山田道弘・育成部長が挨拶を行った。参加者からは、「最初は不安だったけど、すぐに仲良くなれて楽しかった。また来年も参加したい」との声

少年会総会

3月30日、少年会芦津団は大教会で第54回総会を開催し、少年会員212名、育成会員324名

計536名が集まった。

午前10時、祭主・瀧本みちのさん(天津隊)、扨者・今川陽菜さん(東迎隊)、岡村美月さん(春日出町隊)が入場し、祭主が祭文奏上。

続いて、おつとめ。わかぎの集い参加者、門出生を中心に中学生が座りづとめを勤めた後、各隊が六下り目まで交代で勤め、親神様、教祖に練習の成果をご覧いただいた。

式典では、少年会長様の御告辞を加世田団長が代読し、その後、大教会長がお話。

「親神様が生まれ、喜んでくださるのは、皆がたすけ合うこと。それが陽気ぐらしです。それには親神様のお働きが必要で、このお働きを頂くのがおつとめです。これから成長していき、ようばくとなりま

少年会総会

す。ぜひ所属の教会でおつとめを勤められるようになってください」と話された。そして、「今年のこともおちばがえりもたくさんのお友達を誘って、おちばに帰ってください」

と呼びかけた。

その後、今春中学校を卒業する門出生33名を代表し、奥田涼子さん(直轄隊)と山下陽助君(芦山都隊)が教祖の御前で「門出の言葉」を述べた。

次に、お供え作品展入選者を代表して、梶田優菜さん(紀志隊)に大教会長から賞状と記念品が授与された。続いて、川畑徳太郎君、川畑教治朗君(共に始良隊)が演台前に進み、全員で「ちかい」を唱和し、「少年会の歌」を歌って式典を終えた。この後、門出生



は対面所で「成人門出式」を行い、大教会長からのお話があり、お祝いの品が手渡された。

午後からのお楽しみ行事は、模擬店やゲームコーナー、参道にエアートランポリンが登場し、正面階段では巨大だるま落としが行われ、盛り上がりを見せた。フィナーレでは、学生会スタッフ、わかぎの集いの参加者たちが「みちのこキラリ」のダンスを披露し、大きな歓声と拍手の中、閉会した。

春季霊祭合祀

3月24日、春季霊祭において、大教会祖霊殿に新たに合祀されました。

吉田重男の霊

大教会役員

芦東分教会二代会長

本津分教会六代会長

大西明代之霊

上郡分教会三代会長夫人

事情はこび

立教189年3月26日お許し
鎮恵分教会
任命

四代会長

今村 志保 63歳



昭和53年住吉商業高校卒業、
55年おさづけの理拝戴、58
年専修科卒業、59年教人登
録。大阪教区合唱団委員と
して、おうた演奏会などに
出演している。

就任奉告祭 5月6日

恒例祭日変更

月次祭 毎月18日(4月に
限り14日)

会長室報

青年勤務

【大教会】

鍋野 孝(立 治)

【詰所】

島山 雅也(芦 玉)
立教189年3月23日

教務部報

教養掛(3月)

主任 井筒 文夫

教養掛

森 誠一朗・久米千壽子

教人資格講習会第159回修了

川畑 沙織(始 良)

下笠由美香(大 島)

立教189年3月13日

修養科第1015期修了

永瀬きよふみ(白 地)

吉田 香織(芦 東)

立教189年3月27日

おさづけの理拝戴《2月》

柴 裕一(眞 一)

初席《2月》

《2名》眞一

《1名》四ツ山

《順序運びより 3名》

■ 訃 報 ■

泉砂川分教会三代会長

(東津部属)

今川壽男さん

令和8年3月20日出直され

た。享年68歳。



告別式は3月24日、今川聖
一・東津分教会長斎主のもと、
大阪市内の東津分教会で執り
行われた。

昭和34年大阪府生まれ、同
54年天理高等学校卒業、おさ
づけの理拝戴、修養科第456期
修了、同56年教人登録。平成
5年泉砂川分教会三代会長に
就任。

昭和56年より天理教校附属
高等学校マーチングバンド部
コーチングスタッフ、および

同校かがみ寮舎監を勤められ、
兄で同部指揮者の今川保茂氏
(春日出町分教会長)と共に
生徒指導にあたり、マーチン
グバンド部は全国大会で最優
秀賞グランプリを6度受賞す
るなど、輝かしい功績を遺さ
れた。

上級・東津分教会では役員
を務められ、殊に教会の営繕
関係には部内教会にいたるま
で力を注がれた。更に、大阪
教区泉陽支部長を務められ、
支部活動にも積極的に参加さ
れた。

項 目 名 称 () 内教会数	初 席	の お さ づ け 戴	修 養 科 修 了	教 人 数
大 教 会 (1)	1	1		
東 津 野 川 (23)				2
吉 野 川 (29)	2	1	1	
島 原 (16)				
日 方 (15)	1	1		
稗 島 (7)	1	1		
本 津 (2)				
日 高 (2)				
始 良 (5)				
津 和 (12)			1	3
門 司 (6)				
當 別 (26)	1	3		1
大 沖 (3)				
尼 崎 (2)	2	1		
四 山 (5)	1			
大 冠 (2)				
島 下 (1)				
天 山 (3)				
青 保 (1)				
芦 浪 (1)				
甲 邊 (1)				
芦 華 (1)	1			
天 津 (1)				
入 江 (1)				
豊 野 (1)				
紀 周 (3)	4			
勝 明 (1)				
神 の 島 (1)				
兵 庫 眞 洲 (2)				
芦 ノ 郷 (1)				
本 明 勇 (2)	1			
明 道 (1)				
芦 東 (1)				
和 鎮 (3)		1		
神 滝 本 徳 (1)				
芦 明 彰 化 (2)	1	1		
眞 明 彰 化 (2)				
本 明 照 (1)				
芦 眞 伯 (1)				
合 計 (209)	16	11	4	4

月例統計(自令和8年1月1日)至令和8年2月28日)